

施工に強い設計事務所

施工がわからない建築士は全体を考えた図面が書けない

とても当たり前のことですが、造る経過をわからなくてはそのため図面は書けません。日本の設計は許可のために書く図面と建築主にプレゼンする図面を書く建築士がほとんどで、施工現場で職人さんが造るための指針となる指示書としての施工図面が必要なのですが現状は施工屋さんが書くことがほとんどです。(どっちも施工屋さんが書くことはある)



しかしそれはいくら建築士が良いデザインでよい建築を計画したとしても、肝心の造り方を指示していないわけですので施工屋さんの都合でやり易い方法で修めてしまいます。

私が勤めていたハウスメーカー時代も同じでした、生産側の合理性で建築をする場合は営業部(付属して設計部・企画部)で立案、設計して積算しそちらの判断で請負受託します。そして最低数図面(確認申請用の図面)を作成し確認申請受理されると工事に権限が移ります。



工事に移ると施工図が作成され(企画ものならマニュアルで処理)実行予算が組まれます。そこでその実行予算の都合にあわせてそぎ落とされるわけです。そぎ落とした内容で今度は業者をたたく訳で業者さんもたまったものではありません。検査がありますので検査項目はやりますがそれ以外は自分のやり易いようにやっけてしまいます。しかも職人さんにマニュアルを渡して『いつものやつ・お願い!』と丸投げする方もいます。居酒屋ではないのですから、それでは良い建築は出来ないのです。

現場に行っていると図面を書く時間が無いのではないですか?と言われることがありますが弊社ではほぼ毎日現場に通い(通常業務範囲地域の場合)その上でちゃんと図面を書いて、施工に強く全体と詳細の修まりを考えた設計をする建築士となっております。



(株)小西建築工房の許可無く本文書の一部あるいは全文のコピーならびに内容の転用を禁じます